

誓いて我に告げな

佐木隆三

誓いて我に告げよ

1978年12月1日 初版発行

著 者 佐 木 隆 三

発行者 角 川 春 樹

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

電話03(265)7111(大代表) 〒102

振替東京3-195208

信教印刷・宮田製本

Printed in Japan 0093-872235-0946(0)

©Ryuzo Saki 1978

落丁・乱丁本はお取替えいたします

誓いて我に告げよ☆目次

第一章——昭和四十九年四月二十五日

五

第二章——昭和五十二年四月一日

九

第三章——昭和五十三年四月十一日

一四

終章——昭和五十三年九月（現在）

三五

丸正事件関係年表

三九

あとがき

三三

装丁・上條喬久

誓いて我に告げよ

大祭司たちてイエスに言ふ「この人々が汝に
対して立つる証拠に何をも答へぬか」されど
イエス黙し居給ひたれば、大祭司いふ「われ
汝に命ず、活ける神に誓ひて我らに告げよ、
汝はキリスト、神の子なるか」

聖書ヘマタイ伝

第一章

昭和四十九年四月二十五日

千葉刑務所常菜献立。

昭和四十九年四月二十四日（水曜）。

朝 みそ汁（みそ45、魚粉4、もやし80、油揚5）

つけもの（菜40、しょうゆ6）

昼 煮込うどん（乾めん60、たまねぎ60、魚粉2、ラード5、しょうゆ40、ふりかけ10）

夜 ハヤシライス（ばれいしょ150、モツ30、にんじん20、たまねぎ30、ハヤシルー30、小麦粉15、ラード5）

紅しょうが10

昭和四十九年四月二十五日（木曜）。

朝 みそ汁（みそ45、魚粉4、さといも80）

つけもの（菜40、しょうゆ6）

彼は、二十四日の昼食から、いっさい箸をつけていない。

東四舎一房で、いつものように、朝食は摂ったのだ。同房四人のうち、この朝いちばん早く食器を房外へ出したのは、彼であつた。そして、すぐに移送の準備をはじめた。

掛蒲団一、敷蒲団一、枕一、シーツ一、枕カバー一、蒲団衾布一、毛布三。

彼は、三枚ある毛布の一枚で、これらの寝具を包んだ。すでに私物は、前夜のうちに整理している。三人の同房者は、それぞれ無言で、彼の移送準備を見ていたが、定刻に作業場へ出かけるとき、「おめどう」「しっかりやれよ」「さいなら」と口ぐちに言い、握手を交した。

武装した移送官がやって来たのは、午前七時四十分ごろだった。

「舎房は、どこになるのですか」

彼はたずねた。

「行けば、分るよ」

いつも不機嫌な、三十歳ぐらいの、メガネをかけた移送官は、ぶすつと答えて、顎をしゃくった。

彼は大きな包みを肩に、ゆっくりと廊下を歩いた。上告棄却で、懲役十五年の刑が確定したのが、

昭和三十五年七月だった。しばらく東京の中野刑務所で過ごしてから、千葉刑務所へ移されて、十四年経ったのである。

「とつつあん、ここだよ」

東十一舎の、いちばん奥で、移送官は立ちどまった。

「ここは……」

彼は思わず、後ずさりして、声をふるわせた。

「懲罰房じゃありませんか、先生」

「いいんだよ。とにかく、とつつあんをここに泊めるのが、最後のもてなしなんだ」

「そんな、バカな！」

「うん？」

メガネがずり落ちたのを、指輪をはめた左手で押し上げながら、移送官はニヤリと笑った。

「官が決めたことを、バカ呼ばわりするのかよ」

「いや、そういう意味ではないです」

「では、どういう意味なのか？」

反則のひとつに暴言がある。減点の対象になるから、看守に対しては、くれぐれも口のききかたに注意しなければならない。未決期間を加えれば、満十九年になる拘禁生活で、そのことは骨身にしみているけれども、つい「バカ」が出たのは、あすは出所とあって、油断していたのか。

「なぜ、刑務所側の、最後のもてなしが、懲罰房でなければならんのでしょうか？」

「おれに聞いたって、知らんよ」

「自分としては、納得ゆきません」

「これは、上司が決めたことなんだ。おれの仕事は、言われたとおりに、とつつあんをここへ連れてくることだから。がたがたぬかさず、さっさと入れよ」

細い体つきの移送官は、身構えるようにした。すると離れて様子を見ていた十一舎の看守が、咳せき払いをしなが、懲罰房の鉄扉を開けた。

「とつつあん、まだ懲役だということを、忘れるなよ」

「それでは、責任者の、責任ある回答を、要求します。先生、お願いします、お取次ぎください」
彼は、喰い下がった。三年前に、一級から名誉囚に進級している。すでに一級が模範囚だから、名誉囚はさらにその上ということになる。転倒してケガをし、「私の不注意により御迷惑をかけました、誠に申し訳なく心よりお詫び致します」と始末書を入れさせられたりしたが、反則らしきものはほとんどない。だが昭和三十六年三月、この刑務所で新入りの五級だったころ、懲罰房をいちどだけ経験しているのだ。

「どうしても、納得できません」

当然ながら独居房で、日が射しこむこともなく、ずいぶん底冷えする。あすは、彼のほかにも八人が仮出獄になる。もう移送が始まっているはずだが、こちらへ来る気配はない。なぜ、満期出獄の者は、最後の一日が懲罰房でなければならぬのか。

「おいおい、とつつあんよ」

房の扉を開けた看守が、すぐ側に来て言った。

「そう満期風を吹かすもんじゃないぜ。立つ鳥は跡を濁さず、というじゃないか」

「いえ、納得いきません」

「五十二にもなつて、駄々をこねるんじゃないよ。だいたい、移送させてもらえることじたいを、感謝せねばならん立場だろうが」

「……………」

主旨は、分っている。刑期満了にしろ、仮釈放にしろ、出獄する者は、その前日くらいから、隔離

される。娑婆しゃばに帰るとなると、受刑者たちが、競って伝言したがるので、それを防ぐためである。そして同時に、出て行くのを嫉妬しつとする連中が、事故を装って襲撃したりするのを、予防する意味をもつ。もともと、出獄するばあい、極秘に本人に予定日を知らせるだけで、ほかの者には分らないよう、配慮されている。しかし、たいいてい、知れ渡ってしまうものなのだ。まして、仮釈放ではなく、満期出獄となると、早くから分る。反則太郎と異名をとる札つきの者でも、数か月にせよ早い釈放の恩典に浴することができから、刑期満了の出獄は、きわめて珍しい。

「自分は、五十二じゃなく、五十三歳になります。無実にもかかわらずここにぶちこまれてしましたが、なにも、満期風を吹かせようとしているのではありません」

彼は、あきらめて、指定された房に入ることにした。身長百八十一センチ、体重七十八キロの、大きな体を縮めるように、荷物を持って鉄扉をくぐった。

「よろしい」

いつもの、不機嫌な顔つきに戻って、メガネの移送官が、確認のために狭い房内を覗き、すぐに施錠だった。

「それでは、申し送りをします」

「はい、承ります」

「百三十七番、強盗殺人……」

彼は、廊下のやりとりに背を向けて、すぐに房の窓を開けた。入るなり異臭が鼻をついたものだから、空気を入れ替えることにしたのだ。

堀の外を走る、車の音が聞える。屋根のスズメが、ここではなぜか、賑やかである。そして、カラ

カラと鳴るのは、どうやら鯉^{こい}の矢車らしい。

ほんとうに無事に出られるのだろうか。

いまだに信じられない。満期出獄なのだから、この上さらに引きとめられるなど、あり得るはずはないのだが、不安なのだ。この不安は、一日として休まることのないものだった。しかし刑務所へ送られて来てすぐは、置かれた境遇をなんとか納得しようと努めた。受難の季節を、ともかく耐え忍んで、いつか来る春を待つ思いだった。だから柔順な姿勢を見せるべく心がけた。

【昭和三十五年十月四日の日記】

七月二十九日、上告棄却された。

まさか私が此の身に囚衣を着用する等の事を、唯^{ただ}の一回でも想像した事もありません。日本一、いや世界でも有名な弁護士をつけて居たのに全く残念で有る。棄却通知を受けたが唯残念の一言に言切れぬ我が気持……。

然し囚衣を身に着用してから何様に語ろうとも、事すでに結果論に過ぎません。囚衣を着用したからには受刑者としての道を守り、少しでも早く規則を自分のものにするつもりで、毎日毎日一所懸命に働いて居ます。私は自分の身が一番かわゆいです。

囚衣を着用して全く驚いた事は、刑務所にも日曜祭日があり、一日の内に午前と午後の休けいと昼休みが有る。刑務所とは昔話に聞く北海道のタコ部屋と足尾銅山と同様に予想していたのに、休けい時間は雑談のしほうだい。諸先生の紳士的態度には全く驚いた。

元来貧乏人の生活には小児の頃よりなれている。粗食にはなれている。刑務所の食事はよくないが

他の者達の様にぐちをこぼす事はきらいで有る。日々を無事に過ごせる事を心より喜んで居る。又食事をおいしく頂ける事は有難い（正直に毎日毎日働いて生活をして居た者で有る故、刑務所の食事は好きではないが、現在の様な立場では仕方がない）。一日を無事健全で過ごせる事を毎日感謝して居る。

囚衣を着用してより自分で自分を戒め、何事にも短気を起こさぬ様に一所懸命で修養に努めて居るのです。

長い長い未決生活をして居ながら、先ず落書を絶対に書かぬ事、悪い習慣は少しの事でも長い年月には大悪になり、癖になると何時の間にか手が動いて何かくだらぬ事を書く様に成る。人間として之を恥と思ひ書かぬ決心をして居る。今後此のノート以外は何も書かぬ。

然し耐えしのぶ事の修養がたらぬ故、常に之を身に付け自分のものにする様に心掛ける。不幸中のさいわいとして、之は良い時期であると現在喜んで居る。

囚衣を着用するも心は潔白である。之は他の誰にも与えられていない幸いである。何時も心強く思つて居る。

朝に夕に、留守家族と御世話に成つて居る諸先生の毎日が健康で過ごされて行く事を神様仏様に御祈り申上げて居る。

足掛六年にして鉛筆を持つ心の喜び、他の何人たりとも此の喜びは理解して呉れないで有ろう。

彼は、深呼吸しながら、しばらく窓際に立っていた。作業はこの十年間、ずっと炊場であった。昨二十三日も、出役した。壁のカレンダーに、だれかが落書きしたガマ蛙が、ちゃんと残されているの

を、確かめずにはいらなかった。それは、四月二十五日のところに、描いてある。彼のニックネームが「ガマ」なので、刑期満了で出獄の日付に、印がつけてあるのだった。

「とつつあん、どんな気分だい」

鉄扉の観察口から、看守が声をかける。四十年配で、たえず咳払いをしているこの看守には、厭がらせをされた記憶がない。彼は、ゆっくり振り向いて、会釈して答えた。

「そりゃあ、ね」

「嬉しだいろうな。いよいよ、あしたは、十五尺の塀の外へ、出ることができるんだ」

「……………」

ほんとうに出れるのかと、つい、念を押したくなったが、彼はぐっと、言葉をのみこんだ。ここは平然としているように、見せねばならない。へたにびくびくしていたのでは、かえって事態が悪化する。

「先生にも、いろいろ、世話になりました」

「いや、なに、そんな」

だいぶ額のあたり禿げ上った看守が、覗きこんだ目を、しょぼしょぼさせた。刑務所では、看守はすべて「先生」であるが、ひょっとしたら、その呼ばれかたに、居心地が悪いタイプなのかもしれない。

「しかし、とつつあん。考えてみれば、あんたも、相当な変り者だよな」

「そうかなあ」

「そうだとお」

ちょっと、廊下の様子をうかがって、看守は声を低く言った。

「意地を張りさえしなれば、三年前には、もう仮釈がもらえたはずだろ」

「そうかなあ」

彼は、便座に腰をおろしながら、微笑してみせた。じっさい、刑期満了まで、よくがんばれたものだと思う。

「そうだとも」

看守も、また、微笑して言った。

「名を捨てて、実を取る。これが、ふつうの人間の考えることじゃないか。それを、とつっあんは、意地を張りとおしたものだから、満期までつとめさせられた」

「意地といえは、意地かもしれないが、もうひとつ、それは真実の闘いだから、自分としては、退くことができなかったんですよ」

「うーん」

こんどは苦笑して、看守はさらに声を低くたずねた。

「とつっあんは、ほんとうに、殺^{ころ}っていないのかい？」

「そりゃ、そうだよ」

まっすぐ相手の目をみつめて、彼は微笑した。この十九年間、ずっと同じ質問をされてきたような気がする。そのたびに、いろいろな答えかたをした。十三年前の春、この懲罰房へ放りこまれたのも、「犯した罪を素直に認めないようなヤツは男じゃない」と言った詐欺罪の雑役囚に、つい手を振り上げたからだ。